武蔵野日曜聖書講筵

創造神
――創世記第１章１～５節――

１９７５年１月５日
小池辰雄

天地創造　始めがあると終りがある　有りて在らしめるもの　エロヒーム　歴史と自然　言行一如　トーフー　ワー　ボーフー　神の言霊　神 光あれと言いたまいければ光ありき　霊的な創造的行為　霊・光・生命・愛　神 光を善と観たまえり　光となれ　日曜日は砂漠のオアシス　キリストは光源光体　「五」という数

【創世記１・１～５】

１元始に神 天地を創造たまえり。
２地は定形なく曠空くして、黒暗淵の面にあり。神の霊 水の面を覆いたりき。
３神 光あれと言いたまいければ光ありき。
４神 光を善と観たまえり。神 光と暗を分ちたまえり。
５神 光を昼と名け暗を夜と名けたまえり。夕あり朝ありき。是首の日なり。

●天地創造

今年は、創世記からだいたい聖書の順に従って、著しい聖句を中心にして自由にやっていきたいと思っております。

１元始に神 天地を創造たまえり。

２地は定形なく曠空くして、黒暗淵の面にあり。神の霊 水の面を覆いたりき。

３神 光あれと言いたまいければ光ありき。

４神 光を善と観たまえり。神 光と暗を分ちたまえり。

５神 光を昼と名け暗を夜と名けたまえり。夕あり朝ありき。是首の日なり。

これは非常に有名な一節です。一番先に、

「元始に創造せり、神はもろもろの天と地とを」

と、直訳するとそういう言葉の順序になっています。英語でいうと、

"In the beginning God created the heavens and the earth."

です。「天」は本当は "the heavens"（複数）なんです。ドイツ語ではルターが、

"Am Anfang schuf Gott Himmel und Erde."

と。これはドイツ語的な言い方では、冠詞をぬかして、対句のときには、"Himmel und

Erde（エルデ）"（天と地）という言い方になる。もちろん、ドイツ語でももっと文字通りの訳もいろいろあります。

「元始（はじめ）に神 天地を創（つく）った」

という言い方は非常に総括的な言い方だと思う。「創造」という概念は大変な概念です。仏教の方では、この創造というのは神話的な概念として、受けとらないわけです。

創造は、日本の神話でも有りますし、エジプトの「アートゥーム」という神さま、これも創造神であることがピラミッドの壁面に書いてあるそうです。それから、メソポタミアにもやはりシュメール伝承によると、創造の神話のことが書いてある。万物の創造神としての、最高の神としての――セム語では「神」のことを「エール」という――「エロヒーム」の「エール」です。創造ということはやはり、セム系統ではだいたい神話の形態としてある。ただ、イスラエルにおいては、それが他のいろいろな神々との戦いにおいてというような、そういった物語が背景になっている。バビロニア神話もそうです。

イスラエルにおいては、これは完全にそういったようなことでなくて、独占的な神が全く自分の自由意志において天地を創造した。そういうような意味においてはユニークなわけです、形態はいかに神話的であろうとも。もちろん、ヘブライ人の宇宙観は、この創世記を読めばわかるように、天というものはなにかいわゆる蒼穹形です。向こう側に水があって、穴が開いていて、そこから水が落ちてくる。それが雨が降るということで、上なる水と下なる水というのがあって、その水の中に陸が現れてきたというような形態になっている。

●始めがあると終りがある

「元始（はじめ）に」とある。もちろん、「はじめに」と言いましても、神さまに「はじめ」も「おわり」もない。これは無窮、永遠の存在。「はじめ」という言葉は、無限無量の永遠の世界の中にひとつの区切りが忽然として起きた。それが「はじめ」です。だから、「はじめ」ということと「創造」ということは、概念的に切っても切れない関係にくるわけです。

仏教では、「はじめ」ということはない。無始無終という。「はじめ」ということが言われるということは、そこに絶対界にあるひとつの相対界が出てきた。即ち、現象界に切り込んでくる。それが「はじめ」です。神さまは現象以前の世界からそこに現象を現してくる。そこに最初の現象として現れてくるということが「はじめ」なんです。だから、どうしてもそこは創造にくる。「創造」という概念はこの「はじめ」という概念と離すことができない。神さまが「はじめに」と言うと、どうしても「創造した」と必然的に来ざるを得ない。そういうことはまだあまり人が言わないようだけれども。

ですから、「始め」があると、どうしても今度は「終り」があるわけです。創造から今度は完成が来る。この聖書は一貫している。「はじめに」となると、どうしてもこの「おわり」

がくる。この「おわり」が即ち、黙示録で語られている世界です。創世記と黙示録はもう期せずして相呼応するようになっている。アルファとオメガ、これは歴史の世界、神の歴史です。神の歴史は即ち、

「始めあり、また終りあり」

「天地創造、天地完成」

ということ。そういう意味において、

「はじめに神が造った、創造した」

という。「創造する」は「バーラー」という字です。「ベレシース　バーラー」という。「レシース」という字は「あたま」です。「はじめ」という字は「あたま」と同じ字で、ヘブライ語の「アレフ」という字はもともと牛の頭の形の字です。これはギリシア語になると「アルファ」になる。これはみな「アレフ」からきている。もともと、フェニキア文字が先だから。キャピタルレターという、「キャピタル」というのはこの「アレフ」からきている。牛や羊の頭のことを「キャピタル」という。羊や牛を何頭持っているかと、「キャピタリスムス」（資本主義）というのは、そういった遊牧の民がたくさん牛を持っているのが資産家という、こういうことからキャピタリスムス、頭主義という。

創造ですから、はじめは何もなかった。何もなかったところから、そこに生み出したわけです。だから、創造は「生む」という字、あるいは私が言っている「在らしめる」ということ。ヘブライ語の動詞に使役の形があって、これが「在らしめる」です。

●有りて在らしめるもの

出エジプト記3章のあの有名な箇所、

「われは有りて在るものなり」

を私は、

「われは有りて在らしめるものなり」

と読んでいるわけです。「有りて在らしめるものなり」と読んでいる人は世界に私一人です。しかし、神学的にはそのことに多少気がついている人がある。

この「バーラー」「在らしめる」は即ち、私は、

「太陽は地球をして在らしめている」

と言ったでしょ。あの「在らしめる」は光と熱でもって、また引力で地球を在らしめている。と同時に、もうひとつ創造の角度からいうと、太陽が有ったことによって、地球がそこから生じたでしょ。あれはどういう生じ方だか、それは科学的には少し説があるようだけれども。とにかくしかし、太陽がなければ地球はない。地球が無から有に、地球という一つの天体が存在するにいたったのは、太陽という存在からやってきた。その意味においても、無から有がそこに生じたわけです。太陽の中からこの地球がはね飛ばされて出てきた。他

の遊星も。そうすると、「在らしめる」という言葉は、今有るものを在らしめるという意味と、無かったものをそこに在らしめるという、創造的な意味と二通りあることに私は気がついた。この「在らしめる」という言葉が創造の意味を持っている。そこに存在を新たに造り出すことが、この「在らしめる」の一番根源の意味です。それから、有るものをして常に在あらしめているという、この二通りの意味がある。創造的な意味と、それから、それを更に持続させる意味と。これが「在らしめる」ということ。

●エロヒーム

この創世記の

「神 天地を創造した」

という、非常に素朴な意味で、「天と地とを」という。その天も「もろもろの天」と書いてある。「ハッシャマイーム」と言いまして、男性の複数形です。定冠詞がついている。「ザ ヘブンズ」、日本語でいうと「もろもろの天」。

「もろもろの天は神の栄光を表し」

と、詩篇の19篇にある。あの「もろもろの天」がこの「ハッシャマイーム」です。だから、「九天」というね。「九」ばっかりでないです、霊界のことのわかる人に言わせると。まぁ「九」という言葉は、「多い」という意味で使っている。「九天九地」なんだな。孫子という兵法を書いたシナの人がある。その中に「九天九地」という言葉が出てくる。

「善く守る者は九地の下に蔵し、善く攻める者は九天の上に動く。故に能く自ら保ちて全勝するなり。」

なんていう、今でいえば地下壕のことをいうことになる。それが戦法の一つだなんて。九天から襲ってくる。まるで飛行機みたいな。

「攻める時には九天からし、守る時には九地の中に隠れる」

というような気持の言葉だと思ったよ。凄いことを言うなと思って私は驚いた。

この「地」の方はもちろん単数です。「ハ アーレッ」というのは、「ズィ アース」「ディ エールデ」（独）です。

「ベレスィス バーラー エロヒーム エッツ ハッシャマイーム ウェ エッツ ハ アーレッ」

「始めに創造したまえり、神は天と地とを」

と。「エロヒーム」という字は、「エール」というのはさっきの「神」。神というのは、「力ある者」という意味です。「力あるもの」「エール」。そして、「エロヒーム」という形になると、これは複数です。そこで「神々」という。それでは多神教かと。それは比較宗教学的にいうと、多神教的な背景はなきにしもあらず。けれども、これを「既に三位一体の神がここで言われている」なんて、それはちょっと神学的こじつけになって、そういう言い方は私

はしたくない。その「エロヒーム」という複数でありながら、その動詞「バーラー」は単数で、複数の語尾を使ってない。だから、これは「荘厳の複数」という、重々しい複数です。「我ら」というのは「我」というのを、形は複数だけれども、中味は単数。荘厳の複数で、「神々は」でなくて、これは「神は」です。聖書で「神」という言葉はこの「エロヒーム」から「ヤーヴェー」という。さっきの「存在する」の「実存者」、

「われは有りて在らしめる者なり」

という元の形です。「ハーヤー」「存在するもの」という字からくる。「存在するもの」という言い方と、「エロヒーム」「力あるもの」という言い方と、この二つが「神」の言い方ではよく出てくる。第2章になると、「ヤーヴェー」が出てくる。それを両方くっつけて、「ヤーヴェーの神」「ヤーヴェー　エロヒーム」という、二つひっつけた言い方になる。

●歴史と自然

「神、始めに」ということはもう歴史がそこに生ずるということです。

「始めに創造したまえり、神は天と地とを」

と。「天」という言葉は、私は大好きです。これは漢字の構成からいうと、「人」ですよ。「人」の上に環（わ）（○）が付いている。これで「天」になってしまう。もともと「ひと」というのは「神霊が止（とど）まる」と『大言海』に書いてある。本来、我らは人でありながら、ここに神の光輪が来ている。キリストやマリアとか、あるいは偉大な聖者は、よく画家が光輪をうしろに書くね。お釈迦さんも。あれが本当の人なんだ。光輪が来なければ、人にならないわけだ（笑）。みんな来ているかな、光輪が。それが「天」なんだ。本当は、人間は天人なんだ。

そして、天は聖書でも神の代わりに「天」という言い方がある。東洋では、天的存在を天という。「天知る、われ知る」なんていう。そういう意味でもって、宗教的な表現として、究極的な表現として「天」という言葉がある。大空、天というものは、そういった崇高な――天国というでしょ――崇高な感じを我々に与えるところの空間です。そして、この天の中には諸々の天体があるわけだ。

「地」というのはもちろんこの大地のことです。この地球は――まだ彼らは「地球」なんて考えていやしない――円盤みたいに思っている。円盤が水の中に浮かんでいると思っていた。その下には深淵があると。表現はそういったような歴史的な、神話的な、幼稚な次元において言われていても、中味は非常に大事なことを意味している。

天と地。詩篇の85篇11節に、

「まことは地よりはえ、義は天よりみおろせり」

とある。これは「エメツ」（信実）という言葉と「セデック」（義）という言葉が使ってあったと思います。真理あるいは信実が「まこと」です。そして、義、セデックが天から見下ろしたと。天と地が義と信。そういう言い方になっている。

藤田東湖の「天地正大の気」の詩は――後半は非常に勤皇的な思想ですが――前半は非常に雄大な気持を歌っています。

「天地をつくった」

という。ブレイクの神秘的な絵には、天地が接吻しているような絵がある。天地は相接していますから。男と女とか、みんなそういったひとつの、相対的にこれがなければそれが全きものでないような、そういったものがこの「天地」という言葉で表されている。そうすると、天地というのは、諸々の天とこの地、彼らにとってはそのときの全宇宙のことをいうわけです。神は全宇宙を造った。大自然を造った。

「始めに」

というところに歴史的な概念が入っている。それから、「天地」というところに自然概念がきている。即ち、歴史と自然がこの創世記の第１章１節に不思議に表されている。よく神学者は、「歴史、歴史」といって、この「自然」を無視しているようなことがある。これもいかんし、それから今度は、「自然」ばっかりで「歴史」が無視されてもいかん。歴史的な要素と、それから大自然と、この二つが、

「神元始（はじめ）に天地を造りたまえり」

という言葉の中にあるということに、私は非常にはっきりと気がついたわけです。

●言行一如

そして、「始めに神さまは天地を造った」という、これは業（わざ）で、創造の業、「タート」（行為）でしょうが。そうすると、ゲーテさんを思い出す。

「始めに言ありき」（アム　アンファング　ヴァール　ダス　ヴォルト）

という、あのヨハネ伝第１章１節です。ところが、創世記の第１章１節は、

「始めに行為ありき」（アム　アンファング　ヴァール　ディ　タート）

なんだ、もし

「始めに神 天地を造りたまえり」

というのを少し客観的に言うならば。

「始めに業（わざ）があった」

ということ。しかも、それは始めの業だから素晴らしいわざです。無から有へのわざ、創造のわざですから。

「始めに創造のわざがあった」

ということ。「始めに行為あり」と、これは非常にうれしい。創世記第１章１節は、

「始めに創造的な業があった」

という。ゲーテが、ヨハネ伝１章１節の、

「始めに言（ヴォルト）あり」

は、「どうも、この言葉は気にくわない」といって、

「始めに思い（ズィン）があった」

と。それではまだ足りない。

「力（クラフト）があった」

と。最後に、

「行為（タート）があった」

と、そうファウストをして書かしめて、満足していた。『ファウスト』の第一部に出ている。本当は、この「ヴォルト（言）、ズィン（意）、クラフト（力）、タート（行）」の四つが渾然（こんぜん）としているわけです。離すわけにいかない。神さまのは「ヴォルト　タート」（言行）と言ったっていい。あるいは、「テーティゲス　ヴォルト」（活動的な行為的な言）。これは「言行一如」です。神さまにおいては言行一如。そのことはすぐそのあとに出てくる。

「光あれと言い給いければ光ありき」

というのがそうです。

創世記1章1節から5節まで読んで、あなた方が聖霊の力の中に入らなかったら、本当に読んでいるのではないぞ、それを読んでいるうちに力が来なければ。それがこの

「始めに神 天地を造りたまえり」

ということ。私は少し註解書を読んだって、私が今言ったようなことは書いてない。内村鑑三先生のものを読んでも足りない。そんな、人のことを言う必要はないけれども。あなた方は、我々は、もう非常に根源的な現実の中にきているから、今年から本当に力強く展開していかなければダメですよ、ガタガタしてないで。もうそういうカイロスが来た。

●トーフー　ワー　ボーフー

「ベレシーツ　バーラー　エロヒーム　エル　エッ　ハッシャマイーム　ウェ
エッツ　ハ　アーレッ。ウェ　ハ　アーレッ　ハエサー　トーフー　ワー
ボーフー」

という面白い言葉がある。そこで、

「地は定形（かたち）なく曠空（むなし）くして」

と書いてあるね。口語訳では、

「地は形なく、むなしく、やみが淵（ふち）のおもてにあり」

とある。地は始めは無形、どうもはっきりしない。むなしい。「定形（かたち）なく曠空（むなし）く」というのはむしろ「混沌」と訳していい。

「トーフー　ワー　ボーフー」

「形なくむなしく」

という面白い言葉です。ヘブライ語というのは非常にそういうところは、韻の上で面白い

ことになる。「トーフー」は「無形」で、また「ボーフー」も、これもなんともつかみようがないような「空漠たる」もの。そこで、混沌、「カオス」である。カオスに対して「コスモス」（宇宙）を、秩序あるものを造りだすのがこの創造のわざです。ギリシア人はこの宇宙のことを「コスモス」という。

「秩序あるもの、調和あるもの」

という意味です。それを姿からいうと、美なんだよ。この頃の民主主義はこの秩序がないから、ちっとも美でない。これは混沌です。やっぱり、水に関係している。漢字というのは、漢字の成り立ちなんかを研究すると面白い。何か趣味でやりなさいよ、ボヤボヤしていないで。

「トーフー　ワー　ボーフー」で、混沌としている。「ハエサー」というのは「そうであった」ということ。

「ウェ　ホーシェック　アルペネー　テホーム」

「闇」「ホーシェック」が「テホーム」即ち「淵（ふち）」の面（おもて）にと。ここに「あった」とは書いてない。「ある」とかいう言葉はよく抜けている。むしろ非常に強い言い方です。

「闇が淵（ふち）の面（おもて）に」

と、それだけのはなし。その次、

「ルーアッハ　エロヒーム」

これが大事です。「神の霊」。「エロヒーム」は「神」。「ルーアッハ」は「霊」、「スピリッツ」、「ガイスト」。「ガイスト　ゴッテス」「神の霊」。霊は気でもある。息、霊気。霊と言っても、霊気と言ってもかまわない。気、風。霊風でもいい。

「風のいずこより来たり、いずこへ行くかを知らざるごとく、神の霊もそのようにして人に来たる」

と。これはキリストの言葉です。風、人の息も「ルーアッハ」。別に「ネフェシュ」という言葉もあるけれども。神の霊気、風、神の気が、

「神の霊が水の表を覆っていた」

と。混沌なる地がまだ形がなくて、そしてそいつが水の上に漂っていた。それがだんだん固くなってくるわけです。神の霊がそこを覆っていたということが、即ち、混沌に対して本当に生気が、生命が――霊生、霊の生命です――生命が来る。

●神の言霊

さっきから総括的に、

「神 天地を造りたまえり」

というが、いったい何で造ったのか。神の霊で造った。神の霊が造ったので、神さまが何か手でこねて造ったのではない。手でこねて造ったようなことは、創世記第2章で神話的

に書いてあるが、創世記第1章の方は、いわゆる祭司典の資料の中で非常にその点では霊的に進んでいる言い方になっています。

それは詩篇33篇6節に、

「もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の気（いき）によりてつくられたり」（詩篇33・6）

とある。この「エホバの口の気（いき）」という言い方の「気」が「ルーアッハ」という字です。「てんの万軍」とはいわゆる日月星辰、その他天使や何かのことを「万軍」という。それはすべてエホバの口の息によって造られた。これは創造のことを非常にはっきり言っている大事なところです。ここでヘブライ語は対句で言われている。「みことば」という言葉と、「口の気」という言葉が対句になっている。これはシノニム（同義語）で、即ち、神の言は同時に霊であるということです。言霊であり、霊言であるということ。

「ガイストヴォルト」（霊言）、「ヴォルトガイスト」（言霊）

「言霊（ことだま）」なんていう言葉が日本にもあるけれども。日本人は本来そういった霊的な素質があるんですよ。それを抜かしてしまったらダメです。

そういった、言即霊。この神さまの言は同時に、神の息がかかってなければ、言にならないでしょうが。神の息は霊気でしょうが。発する言は同時に霊であって、力を持っている。生命を持っている。だから、キリストは完全にその中に入っているから、

「わが言は霊なり、生命なり」

と言われたでしょ。

「私の言は意味ではない。単なる意味を言っているのではない。頭で受けとったってダメ。全存在で受けとれ。そうしたらばその言の現実がそこに成っていくぞ」

というのがそのことです。「意味がわかった」ではない。

「言の現実が汝のうちに成れ」

ということです。そういう受け方をしなかったら、聖書は絶対にいつまでたっても、何年やってもダメですから。聖書の受けとり方を、

「これはどういうように解釈するだろうか」

なんて、しょっちゅうやっているね。それではいつまでたってもくたびれてしまう。聖書を読んでいて、何かしらんけれども、自分の中に霊が、この創造の業が入ってくるわけです。

私は、「始めに行為ありき」で、元日からもう仕事を始めた。あなた方は空しいことはやめて、本当に実のある生き方をしてください。私なんか70歳になってやっと気がついているバカモノですけれども。あなた方はまだ20代なんてね、もったいなくてしょうがない。私もういっぺん20代くらいに、ファウストみたい成りたいものだな。ファウストを地でいくかな。あの通り行ったら困るけれどもね（笑）。

●神 光あれと言いたまいければ光ありき

神の霊 水の面を覆いたりき。

3神 光あれと言いたまいければ光ありき。

これが今正に言った、言即行というわけですね。

「神 光あれと言いたまいければ光ありき」

これはもう即なんです。即行、即業、どっちでもいい。これを「業」と読むと、仏教の業というのはうまくない言葉になってしまう。

神さまは、それではヘブライ語で、

「イエヒ　オール　ワ　イエヒ　オール」

「光あれと言い給いければ光があった」

と、ヘブライ語で仰ったか。そいつは知らんよ。ヘブライ語ではただそう表現しただけで、ヘブライ語で仰らない。神さまの言葉はおよそ何語でもない。これは「ウルヴォルト」「根源語」というのは天的な言葉ですから。ただ彼らはヘブライ語で受けとっただけのはなしです。「オール」というのは「光」という字です。

「光あれと言い給いければ光があった」

と。創世記第１章１節は、私はヘブライ語を一番先に教わった時に、この一節を読むのに、図書館に行って――まだ字引を持っていなかったから――一生懸命に勉強したことを今思い出しますよ。あれはバラックの図書館でね。私の大学時代です。

「神 光あれと言いたまいければ光ありき」

と。一番先に光があった。もうこれを聞くと、ヨハネ伝をすぐ思い出すわけでしょ。

「1太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2この言は太初に神とともにあり、

ここに「太初に」と書いてあるね。

3万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

すべてこの「言」によって成ったと。「言」というものは単なる言葉でないことがわかる。非常に霊的な存在ですから。

4之に生命あり、

そうでしょ、言に生命があったと。

この生命は人の光なりき。」（ヨハネ1・1～4）

だから、「言」だとか、「光」だとか、「生命」だとか、こう言われているものは、歴史の始めにあったという。そうすると、始めの始めとでも言いたいね。即ち、キリストは神と共に歴史の一番根源にもう既に存在していた。そして、およそ

「成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし」

というんだから。神の創造の時に、このヨハネ伝の角度からいえば、キリストという霊的存在があって、そして、この歴史的な創造の業に参与されたということになるわけです。

●霊的な創造的行為

これを今度は旧約の方でいうと、知恵文学の中に、

「智慧が神と共に一緒にいて、その創造の業に参加した」

というようなことが書いてある。箴言と、旧約外典の「智慧の書」というのがある。そこにはそういうことが書いてある。「智慧」とは「ホクマー」という。マカビ書だとか、あるいは智慧文学の13章だとか、「シラーハ」という書にも出ている。旧約では、そういった旧約外典的な角度の書の中に、あるいは箴言にある。箴言は正典の中に入っているからちょっと見よう。３章19節、

「19 **エホバ智慧をもて地をさだめ聰明をもて天を置きたまえり**」（箴言３・19）

なんて書いてある。この「智慧」だとか「聰明」だとかいっている言葉。これは擬人化されている。これはヨハネ伝的にいうと「ロゴス」「言」なんです。そういうものが「神と共にあった」というところから、「エロヒーム」という複数を使ったという想像もできなくはないかもしれないけれども、まぁそこまで勘繰ってはちょっとどうかと私は思う。

それから、創造にいかにその言、霊があずかっていたかということは、ヨブ記をみるといい。ヨブ記の33章。あのヨブの友だちが言っているところです。

「神の霊われを造り、全能者の気息われを活かしむ。」（ヨブ33・４）

という言葉がある。人間の創造が神の霊によるという。

自然界にしろ、人間にしろ、創造のわざは、「神が造った」というが、何で造ったかというと、この霊の力で創造した。これは私たちは自分の体験でもわかる。何か創造的な行為というものは「スピリチュアル」（霊的）なものです。霊的なひらめき、力から来る。発見でもそうでしょ。ニュートンがリンゴの落ちるのを見て、宇宙引力（万有引力）をはたと気がついた。これもやはりスピリチュアルな働きです。知恵がやはりそういった霊的なもの。創造的な詩人だとか芸術家は、第一流のものはみなそういったものを持っています、ベートーベンの音楽にしろ、バッハにしろ。ウワーッと湧いてくるわけだ。これはみんな霊的な角度です。だから、そういう意味において「ガイスト」が――これは「精神」ではないですよ、「精神」なんて言ったら観念になってしまう――霊的なそういったものが、

「神が始めに天地を造った。大宇宙を造った」

という。人間の歴史の始めに天地の創造が、ちゃんと庭が出来てしまったわけだ、大宇宙という我々の庭が。

私は天文学をもっと勉強したいと思っていますけれども、素人的にも。誰か天文のことを勉強している人がいますか。おもしろいですよ。気持が雄大になってしまう。まぁとて

も大変なものですよ。太陽系なんてものはまだ小さなもので、これを含んでいる宇宙みたいな宇宙がいっぱいあるそうだから。もう気が遠くなるどころのさわぎではない。

●霊・光・生命・愛

「光」という。光という字は、もちろん太陽からこうやって（七本の）光線が出ていて、この形からシナ人はこういう字を作った。素晴らしい字です、光という字は。我々が見る光のうちで一番でっかいやつはこの太陽だ。

「われは世の光なり」

というキリストは神の霊光を受けた。神の霊光に貫かれ、それがキリストを通して発している。だから、変貌の山において、キリストは真っ白に光ってしまって眩（まばゆ）かったという。そういうように私たちの魂も、我々は本質的にキリストを受けとるときに、この光になる。

最初に神さまは、創造したものは光であった。その光の具体的な実体は、この霊界のキリストであった。それが地界に臨んできて、イエスとなった。イエス自身は実に光そのものの人であったから、あれほどの驚くべき光の言、光のわざが展開していったわけでしょ。だから、十字架にかかってお終いなんてものでは絶対にないわけです。甦ってきて、更に天界へ行って、それから今度は、火のごとく臨んできたのがこの聖霊ではないですか。だから、今、霊光と言ったが、霊と光とがまた切っても切れない関係にあるわけです。神の霊はそれ自身が光を持っている。それ自身が生命である。それから、愛である。

要するに、光であり、生命あらしめている。有らしめるということは、無から有を生ずる。さっき言った、有ならしめるもの、これが創造のわざ。だから、この神の霊を受けると、私たちは創造的な人間になる。創造的な人間にならないかぎりは、まだ本当に受けてないと言ってもいいくらいです。何かやることに創造的なものが湧いてくる。いわゆる学者よりも――学者がわるいと言っているのではないよ――やはり創作家だね、吉川英治みたいな。ああいう人たちはみなそういった創造的な人間です。シラーも言ったでしょ、

「神さまは最大の芸術家である」

と。これは本当にそうですよ。神さまは最大の芸術家で、それの一番傑作は人間で、しかも女性だというわけでしょうけれども。女の方はしっかりしてもらわなくては。いい加減なひとになったんじゃダメです。

そういう、神さまの創造のわざによって出来上がった私たちが創造的な人間でなかったら、みんな出来損ないということで、神さまに申し訳ないわけです。

そういう創造神によって私たちは有らしめられている。創造という言葉は非常に愉快な言葉です、この言葉を見るだけで。どうぞ生涯を通して創造的な人になってください。あなた方がやることは何であっても、そこにおのずから創造的な面が出てくるわけです。いわゆる「マッヘン」でなくて「シャッフェン」。人工的な作るではダメで、神的な創造です。

●神 光を善と観たまえり

「光」というのは私たちにとっては、具体的にいえば、キリストのことであります。このキリストの光が私たちにとってはもう光源であります。

「4**神 光を善と観たまえり。**」

と、妙なことが書いてある。「善」というのは「いいなぁ」「トーブ」という字です。あるいは「さいわい」「善福」と訳してもいい。「さいわい」という気持も入っている。旧約の中にはよくこの「さいわい」という言葉は「トーブ」という字が使ってある。善福である。「善いかな、さいわいなるかな」という。もちろん、「よい」という言葉は「ああ、いいなぁ」という「よい」と、それから道徳的な気持の「善」と両方ともあるわけです。神さまはそれで「よし」と見た。やはり、英語も「グッド」で、ドイツ語も「グート」だね。

「**神 光と暗を分かちたまえり。**5**神 光を昼と名け暗を夜と名けたまえり。夕あり朝ありき。是首の日なり。**」

神さまは、闇を「よし」とは言わないんだ。造ったのは光だけでね、闇を造ったとは書いてない。いきなり、「光と暗を分かった」と。そして、

「5**神 光を昼と名け暗を夜と名けたまえり。**」

と。もちろんこれは、昼と夜とがあるから、そして夜の方は闇だから、そういうところをただこういう表現で言ったんでしょう。そうそう詳しく思索したあげくに発している言葉ではない。

光と闇とを分けた。なるほど、それは昼と夜がありますよ。それから、光のないところには闇が昼間でもある。そして、何となく闇というのは悪と結ぶような――だいたい、悪いことは暗い所でやるから、ドロボーだとか強盗だとか――真昼間に悪いやつもいるけれども。善悪という表象と、光と闇とがだいたいくるわけです。

けれどもまた、夜がなかったら大変だよ、眠られなくなったら。少し明るいと眠られない人があるけれども、まるで明るくても眠れる人もあるし。若い人はだいたい明るくても眠ってしまう方です。年取ってくると、だいぶそれがダメになる場合があるけれども、私はどっちでもいい。

光と闇とを分けたということと、善悪を分けたということは、アナロギア（類比的）に言うことができるでしょう。けれども、この場合、闇を悪とはべつに言ってない。ただ、善き面だけを言っている、「善し」と。分けたのも「善し」と言う。全部それはひとつの秩序として、自然界の秩序として結構なことだと。

ただ今度は、本当に光のあるところには闇は消えていく。分ける必要はない。太陽の光がくれば、この部屋は明るくならざるをえない。光のあるところはその回りを明るくせざるを得ない。

●光となれ

だから、私たちに

「お前たちは光となれ」

と、光を創造した神さまは仰る。私たちがまた本当にこの光を受けとらなかったらダメだ。人生は、私たち自身が本当に光れば、どんな運命環境も乗り切っていく。これが光ってないものだから乗り切れないんです、運命環境にいろいろゴタゴタしてしまう。自分が本当に光っていれば、何がどうなろうと、逆にそれを変えていく。運命環境を変えていくだけの力を持っている。自分自身がそこに「コスモス」（宇宙）を創造してく、温かくしていく。光は熱いから。

熱さを持たない光はダメですよ。熱いということと愛とは相即するだろ。光は同時に愛を持つ、質的に。愛は同時にまた光を持っている。愛と光とはこれまた離すことができない。熱だからね、熱愛というような。冷たい愛なんてものはありはしない。闇の方は冷たいよ、光がないから。これは冷たい。冷やかな人間というのは困るよね。体温からいっても女性の方が温かいようだから、女性の方が、愛が本質的にはあるようだけれども（笑）。そういう光。

だから、光は闇を消してしまう。本当の善は悪を救っていってしまう。キリストという善は、お釈迦さんという善は、この汚界の世界を全部救い上げていく。悪を消すのはこれはもう救済の世界です。話は少し先へ進んでしまったけれども。救いの世界。まぁ同じことを何度しゃべったっていいよ。決して頭で受けとってまたしゃべってもいないんだから。

本当の善は――単に悪と対立している善はまだ相対的な善です――本当の善は悪を知らない善です。これは親鸞の歎異抄あたりに、

「弥陀の本願に、この救いにもれるような悪は、それに勝つような悪はない」

というようなことが書いてあったでしょ。どんな悪もこれにはかなわない、ということはこの善の世界です。観念的に絶対的な悪があるとか何とか言う人があるよな。しかし、どんな悪も結局、この善にはかなわないという、そこを持ってこなくてはいかん。ドストエフスキーあたりはどうかな。最後はそこに行っているかなんかしらんが。

そういう善。絶対の善。絶対の光。私たちは相対的存在だけれども、この絶対の善、絶対の光を受けとっていく在り方をしなかったら、本当の勝利はこない。いわゆる善悪の彼岸といって、ただぼやかしてしまうのではない。本当の善は悪をも救い上げてしまうし、闇をすっかり光に変えてしまう。霊的変化を起こす。それを霊化現象という。霊化させてしまう。そういう意味においては、「霊化」ということは非常に大事なことです。それは聖霊が来ると、その呼吸がわかる。だから、人を品定めしなくなってくる。つまらない批評なんかしなくなる。「誰がどうだこうだ」なんて下らないことを言わなくなってくる。どんなに人に迫害されようと、誤解されようと、逆に、

「自分を責める者のために祈れ」

とパウロが言ったけれども、本当に祈れるんです。勝っているんだから。本当に勝っているから祈れるんですよ。

もう何といいますかね、このキリストの中に入ってしまうと、もの凄いことに――私は今ものを言おうとすると異言になりそうになる――あなた方とここでしゃべっていながら、その世界に入っているから、言葉が時々もつれてしまうんだよな。語りながら、私は冥想している。そしてその中に入っていますから。そういう、御霊の世界に入って、もういわゆる相対的なところを超越し乗り越えるというと、まぁなんとこれはありがたいことかなぁと。創造の神と共に創造していくことになってくる。もうそういう角度になったら、創世記のこの記事以上の世界に入っているんですよ。

●日曜日は砂漠のオアシス

「神 光と暗(やみ)を分かちたまえり。5神 光を昼と名け暗(やみ)を夜と名(なづ)けたまえり。」

と。まぁ、相対的には、「光を昼、闇を夜」と、それはなんでもいいよ。

「夕あり朝ありき。是首(これはじめ)の日なり。」

面白いね、このユダヤ人というのは。「夕あり朝あり」といって、夕方から始めるんだね。

「夕あり朝ありき」（イェヒ　エレブ　ワ　イェヒ　ボーケル）

「エレブ」というのは「夕」、「ボーケル」というのは「朝」。

「これ最初の日」（ヨーム　イェ　ハート）

第一日というわけ。ユダヤ人は日没から日没へ数えていく。ユダヤ人の安息日は金曜日の夕方から土曜日の夕方まで。この間は何もしない。そして、日曜になると、キリストの復活の日だから、ユダヤ教とキリスト教と両方やっていると、一週間に二日休みがきてしまう（笑）。だからということでもないけども、この頃は土曜、日曜はだいぶ休むようになってきた。神さまは六日間働いて、創造の業をして、七日目に安息に入った。それは我々の生活のひとつのリズムですよ。生活の律動、リズムといいますかね。これをみんな侵しているからダメなんです、日本人は。このへんをいい加減にやっておいて、ここは遊んだり、へたすると何か日曜日に仕事をしたりする。五日間はフルに働いて、土曜は半日になっているけれど、そして日曜日は完全に霊界に入っていかなくては。聖日というはそのことです。霊界に、キリストの中に休らうことは力を得ることなんです。日曜日は、根源の力を得る。これはオアシスで、砂漠を歩いてきて、オアシスに来て、泉のほとりで水を飲んで、果実を食べる。聖書を食べる。我々にとっては、聖書は水であり、果実であり、食べ物である。御言という霊的な生命です。

だから、日曜日に聖書を読んでいて、生命が受けとられなかったら、それはしょうがない。

「日曜日に集会したらくたびれました」

なんていうのでは。生き生きとして帰ってくれなくては。

「来ざるを得ない」

と言って、みんなやって来るんでしょ。「来ざるを得ない」でなくて来る人は来ないでいいよ、お務めで来る人は。サヨナラするよ。

「もう何がなんでも、私は来ざるを得ません」

として来る。皆さんはそうだと思っています。まぁやって来ているうちにそうなります。

そういうわけで、安息日には神の力を受けて、そしてまた推進していく。もちろん、毎日毎日に静中の動、動中の静があるわけです。

●キリストは光源光体

「是首（これはじめ）の日なり」

と。善かったと。即ち、この天地創造の第一言を1章1節で言っている。これは総括的な言葉ですよ、もちろん。それから、一番先に創られたものが光であった。これはっかりは絶対に忘れてはいかん。だから、私たちが被創造者でもって一番受けとらなければならないのは、この光の現実です。霊光の現実。光を受けとるということは即ち、もうはっきり、聖霊を受けとることです。霊光ですから。あるいは、光霊と言ったっていい。光は即ち、キリストであるから。具体的にキリストであるから、このキリストを受けとるところに御霊は来ざるを得ない。光体だからね、キリストというのは。光源、光体。我々の光源であり、光体であるから。これはヨハネ伝1章。その点でヨハネ伝1章と創世記1章1節から5節は相呼応しているわけです。

そういう内実をはっきり受けとりましたね。もちろん、この創造された自然界と相呼応してまた天界があるわけです。神の天界とこの自然界とは、その意味において非常に相呼応し、我々はこの天界をこの自然界において受けとっている。即ち、そこがひとつの、ある意味において、この霊的な現実であるわけです。まぁ霊界と言っていいかどうかしらんけれども。

そういうような具合にして、この天地創造の神のわざを私たちがそのようにして受けとるというと、創造的なことになる。そしてこの自然界は「神の似姿」です。自然界は神の似姿であるから、キリストが一つの花を見て、

「この栄光はソロモンの栄華もかなわない」

と言われたでしょ。人工的などんな素晴らしいものも、神さまが造ったひとつの花にかなわないと。それはキリストは本当に神の創造のわざを見ておられる。自然界には光が宿っている。太陽の光を受けなければ、これは花が咲かないんだから。

ここには、失礼ですけれども、目の見えない方がいらっしゃるけれども、しかし、この霊光は、肉眼の光よりかもっと素晴らしい霊光の世界は、冥想の世界で受けとれますから。

是非ともその霊光の世界でもって進んでください。夢でもって、非常に色彩が出てくる夢が時々あるよ。それから、祈りの世界で光が出てきたりする。それはもう凄いものですから。そういう光の世界です。

●「五」という数

そこで、「五」という言葉が出てきたね。「地・水・火・風・空」という。五本の指。我々の造られている手足の指は五本。

「地・水・火・風」、これはみな創造のところに出ているよ。天地の地。水の上に覆っていた。火、風、これは霊の世界です。水も霊です。聖霊のことを水と言っているでしょ。火はもちろん、「火の如く臨んできた」と使徒行伝に出ている。風、もちろんこれは霊です。風の如しと。だから、「水・火・風」はみんなこの霊を表している。地は母体です。母。大地。諸々のものを生産する。「なりいでもの」「たなつもの」という。この「たなつもの」のいろいろなものを作りだす、地はそういった創造的な力を持っている。人間も女性は産みいだす。

それから「空」。空は「無」に通ずる。「地・水・火・風」を「四大」という。四大をまた総括しているものが空である。空は無である。この無は、無の中に創造力が宿る。非常におもしろい。私はこの「空・無」の世界をよく言うわけです。というのは、自分が空しくならなければ――これは混沌の空しくではないよ、虚無の無ではない――神の創造のわざが私たちに働くためには、自分が本当に投げ出されて、空となり無となるところに、神の創造のわざがやってくる。

だから、

「無即無限無量」

と言っているのがそのことです。その内実を水といい、火といい、風というのが表している。地は一切のものを受けとってしまう。地は何ものも受けとってしまう、大地は。地は、もし何というかといったら、これは愛ですよ。一切を支えている。この地というのは一切を支え、一切を産み出している。愛、霊、無。これがその「五」という数字から私が冥想した内容です。

１月５日というのは、１即５なんだ。「１９７５」もおもしろいね。「７」も完全数です。７は聖書では神聖な数です。「９」も無限を表す。９は３の二乗だから。「３」はまた神聖な数だ。まぁみんなれそれぞれ――なにもこじつけるわけではないけれども――そういうわけで、「地水火風空」という、こういう事態です。

創世記１章１節から５節の内容を霊的に私たちはこれでつかんだ。そして、中心はこの創造と光にあるということです。創造の人、光の人として、この年を進んでいきたい。こういうわけであります。終ります。